



## 保育の対象は

## 幼児一人々々にある

倉 橋 惣 三

保育の対象は幼児一人々々にある。すべての幼児（前々号所載）というも、すべては幼児一人々々に他ならない。日々、直接に、（前号所載）というも、幼児一人々々に對してこそである。一人々々に對する眞實な關心なくして保育のこゝろの眞實はない。

一人々々というは、個々の個性に即するということでもある。それがなければ、保育の方法を誤る。又、一人々々を貴ぶというは、基本人權の眞の尊重でもある。それなければ、人權の所在に眞に患なりといえない。しかし、こゝでいうのは、心理的に方法の正しきを得るためと、人權的に個の確立のためとだけのことではない。寧ろ、もつと実体的に個体的に、日々の實際保育の対象としてある。その意味において、一組三十人の保育は、一人々々の保育を三十しているのである。一分団五人の保育も、一人々々の保育が五つ行われているのである。保育が集団を対象とするということも、一

人々々の保育のための方法的対象として集団生活を必要としていることで、集団が保育關心の究極対象ではない。一人々々を離れて人間愛の眞實はなく、人間愛の結合なくして、保育の眞實はない。愛ほど一人々々に切實でなければならぬものはない。一人々々の切實に總和はあつても、一人々々への切實は決して、總和の部分ではない。

幼児達は集団の中におかれて社会的生活を営む。その社会的生活の中に、一人々々を活かしてゆく。社会的でなくして生活的であり得ない。従つて本質的に生活保育のためには、形體的に社会的保育でなければならぬ。その意味で社会的ならずして、各々の一人々々は眞に活かされない。一人々々が眞に活を得ないところに、保育が行われ得ることはない。故に、保育の實際は常に社会的に行われるのである。一人々々を保育するということは、一人々々を孤独におくことでは決してない。たゞ、一人々々を社会の中に埋没しないことで

ある。社会の中に一人をも見失わないことである。眞の保育者は一匹の迷える羊の子をも見逃がさない。常に一人々々後を追ひ一人をも見忘れず、一人々々を、不斷に我が心の附近に見守る。方法的に個性保育である前に、又、觀念的に個人保育である前に、めい／＼をめい／＼として愛し、めい／＼をめい／＼として愛うることこそ保育の眞のこゝろである。

眞に花を愛する人は、交り咲く花壇の中に、特に色美しく特に香り高い花を愛する人ではない。目立つものに目をつけるのは、どんな心ない者にもあり得ることである。少くも、その人を心ある人とはいえない。花に対して然り、況んや子供に対するにおいておや。しかも、教育には、心なきといふ以上に、そうなり易い傾向がある。本来において結果を求めるところでもある教育において、よきものに目のつくのは自然でもある。健康児・優秀児が教育者の目につくのは自然である。或はまた、わが教育を遂げ易からしめると思われる柔順児の好ましいのも自然である。更に、幼稚園などにおいて、美容の子が教師に好ましいのも、一つの自然でもある。しかし、教育は、結果の楽しみばかりではないし、まして、教師の好みばかりでもない。自然といつて、ただ容易な自然ばかりでもない。時に、難きに打克つ努力の興味でもあり、時には、難きに挑む熱意でもある。殊に、結果の難さを思わせる子供たちの現状は、同情と憐憫とを惹くものが多い。——そこに、大輪美彩の花の外に、小さく、みすばらしくさえある、

可憐の花が教育の眞の關心を促すのでもある。教育の心にとつて。

これを保育の極く實際においていえば、そういう子らこそ、一人一人として保育しようとするものにとつての、見失えない対象である。一人々々という以上、關心は各の子らに平均でなければならぬ。しかし、保育者の心のもち方としては、そうした、見失われ易い子、極言すれば、好ましくないような気もする子らに、注意と愛情のより多い傾倒が行われる時こそ、一人を見逃さない実際になり得るのである。若しそれ、すべてが、自分の好きな、教育し易い、教育に手のかゝらない子らの一人々々だけならば、一人々々といふことに、何んの自然以外の意味があるろう。況して、そういう一人々々を撰んでの教育に、特に一人々々といえる教育の苦心があるろう。保育者は、組の中に、探し出しても、手のかゝる一人々々を、保育の第一の対象とすべきである。

『憎くまれ子世に憚る』という、昔のいろはガルダの言い草のことが、幼稚園の中にあるう答はない。『色の白いは七難かくす。』なんて花柳界でもいわれそうな評価が、幼稚園の中にあるう答もない。強情な子でも、色の黒い子でも、一人々々として、大切な教育の対象であることは素より、先生の目には、手には、一層愛を注いでやりたくなる子である。一人々々とは、一人をも見失わないことであると共と、保育の対象として予め評価しないことである。